

大須賀地区の農業の現状と新しい形

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森脇, 琢矢 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/9963

大須賀地区の農業の現状と新しい形

森脇琢矢

- 1 はじめに
- 2 大須賀地区の農業
 - 2.1 大須賀地区の農業史
 - 2.2 大須賀地区の農作物
 - 2.3 現在の課題
- 3 農に対する取り組み
 - 3.1 JA 遠州夢咲
 - 3.2 JA と関わる農家の示す農の形
- 4 新しい農業の形
 - 4.1 「脱 JA 化」という方向性
 - 4.2 NPO 法人「とうもんの会」
 - 4.3 「脱 JA 化」する農家の示す農の形
- 5 考察
- 6 おわりに

1 はじめに

今回の調査地が決定してから、大須賀地区のイメージをつかむために、一度大須賀地区へ下見に行った時のことだった。遠州横須賀の町並みもそうだが、私は素晴らしい田園風景に魅了された。田園風景は農家が農業を営むことで成り立つ。その農業について調査したいと思った。本章では、大須賀地区ならではの農業について調査するとともに、大須賀地区ならではの農業観や、そこから見出すことができる農業の方向性について明らかにする。

2 大須賀地区の農業

まず初めに大須賀地区の農業の歴史、農作物、現在の課題について述べることにする。

2.1 大須賀地区の農業史

まず、大須賀地区の農業の歴史について記述し、大須賀地区ではどのような農業形態が

営まれてきたのか見ていく。大須賀地区では、昔から稲作などの農業や漁業が盛んだったが、高度経済成長による近代化の影響を受けて第一次産業は衰退していった。話を聞いた人の中では、以前は養蚕、養豚、漁業をやっていたが、現在は高齢化やコスト高の影響でやめた人が多い。また、T氏（男性、30代）によると、大須賀地区は、以前では国が助成金を出して全国の各地域に特定の農作物を栽培させる「パイロット事業」と呼ばれる事業を展開した結果、米、茶、みかん栽培が大変盛んだった。しかし、生産過剰や売れ行きの低迷により、みかん栽培は衰退していったそうである。また、副業としての養蚕や養豚は、農業従事者の減少や、売れ行き低下により、現在の大須賀地区ではそれらに従事している人たちは少ない。最近では行政などによるまちおこし事業により、イチゴなどの観光農園が発展しており、観光客も増えているそうである。

2.2 大須賀地区の農作物

次に、大須賀地区でとれる農作物について記述する。明治、大正の頃の農作物の主なものは米、麦、甘藷、煙草、野菜、茶などで、余暇に砂糖づくりや養蚕、養豚、養鶏などの副業を取り入れていた（大須賀町誌編纂委員会 1980）。大須賀地区の農作物について O氏（男性、80代）と K氏（女性、80代）によると、大須賀地区は米、イチゴ、メロン、さつまいも、さといも、砂糖などが主要な農作物である。冬に採れるさつまいもやさといもは加工して切り干し藷や干し芋にして商品化している農家が多い。最近では「ゴールドラッシュ」と呼ばれる品種のとうもろこしを地域の特産品にしようと地域全体で力を入れており、「ゴールドラッシュ」を栽培する農家も増加した。実習期間中に大須賀物産センターサンサンファーム（以下、サンサンファーム）で「とうもろこしまつり」が開催されていたが、そこでも「ゴールドラッシュ」が販売されており、「ゴールドラッシュ」を地域の特産品にしようという動きを実感することができた。

2.3 現在の課題

現在、全国的に農家の高齢化や後継者不足が問題となっているが、大須賀地区も例外ではない。農業人口の減少、後継者不足、耕作放棄地の増加などの問題が目立つ。たとえば、大須賀町の農業従事者数（自営農業に従事した世帯員数）は、2000（平成 12）年は 1243 人、2005（平成 17）年は 863 人、2010（平成 22）年は 671 人となっている（農林水産省統計情報部 2001, 2006, 2010）。このように、大須賀地区の農業人口は年々減少傾向にある。農業人口の減少は、大須賀地区だけでなく全国的にも問題となっており、その課題をどのように改善していくかが問題となっている。

3 農に対する取り組み

現在、農業に従事するにあたって、JA の存在は非常に大きい。昔から農家は JA を介し

て農作物を販売したり、JA の支援によって農業に従事してきた。本節では大須賀地区管内である JA 遠州夢咲大須賀支店の人に農に対する取り組みなどについて話を聞き、また、その JA に頼って農業をする 2 人の農家に農業史や農業観について話を聞いた。

3.1 JA 遠州夢咲

JA 遠州夢咲の M 氏（男性、50 代）に農に対する取り組みや現在の課題と今後の展望について話を聞いた。JA 遠州夢咲では、「営農指導」、「共済」、「経済」を柱として、共済や安心、保証を提供している。大須賀地区では、新規就農の人が増えているため、意欲のある人には助成金や農作物の作り方の指導などの新規就農支援をしているという。また、少しでも高く農作物を作れるように工夫している。農家に販売する肥料なども、複数の農家にニーズがある肥料を一度に大量に仕入れることで、良いものを安く手に入れるように工夫しているという。

現在の課題として、新規作物登録農家は増えているが、全体的な登録農家は減っているという。また、「営農指導に来てくれない」、「営農指導に定期的に来てくれない」、「情報提供をもっとしてほしい」、「共済加入の案内には来るけど営農指導には来てくれない」などの不満の声が農家の人たちから上がっており、それに対する対策が今後の課題だという。また、最近ではペットボトルでお茶を飲むほうが飲みやすく、それによりいつでもどこでも飲むことができるようになったために、急須でお茶を飲む人が減った。その影響で茶価の低下とともにお茶の生産が減少し、需給バランスが崩れてきたという。その対策として、お茶の海外への輸出を始めたという。輸出先の国によって農薬基準などの制限もあるが、お茶の海外輸出は増加しているため、期待できる方向性であるという。

3.2 JA と関わる農家の示す農の形

本項では JA と契約し、JA と手を携えながら農を営む人びとの声を取り上げ、その人びとの農に対する取り組みについて紹介する。

A 氏（女性、80 歳）

20 歳の頃から農業一筋でずっとイチゴを栽培していたが、夫が亡くなってからはさといもや干しいもや野菜を栽培している。以前からずっと JA に頼っており、指導員とよく相談している。指導員が定期的に回ってきて指導してくれるからありがたいと話す。相談や悩みの受け付けもしており、A 氏はとても頼りにしている。農業に対しての工夫やこだわりは特になく、夫が亡くなってからはのんびりとやっているという。

B 氏（男性、82 歳）

昔はにんじんや大根を栽培していたが、体力的に厳しくなって栽培をやめて現在ではとうもろこしの「ゴールドラッシュ」や、さつまいもを加工して切り干し蓴を栽培している。

田んぼ 7 反、畑 8 反あったが、田んぼはなくなり畑も半分にして自分が栽培できるだけの分を栽培している。また、旧大須賀町の沖之須地区では、昔はイチゴの温室栽培をする農家が 10 件ほどいたが、現在では 2 件に減り、昔から農業をしている知り合いも 5、6 人に減ったという。以前から JA を頼りにしていたが、現在では町の肥料屋を頼りにし、肥料を購入する代わりに農作物を出荷してもらっているという。農業に対してのこだわりはなく、今は楽しむためにやっているという。若い人たちは農業に対してこだわりがあるが、自分たち年配農家はこだわりを持っている農家はあまりいないという。

以上の 2 人の農家の話から、JA の営農指導を利用して農業をしている一方で、年配農家は以前から農業を営んでいるという理由で今でも農業を続けていることがわかった。また、自身は農に対してのこだわりや工夫は特にない一方で、若者農家にはそういったこだわりや工夫があるところの 2 名は認識していることがわかった。

4 新しい農業の形

前節では JA と JA に頼る農家について取り上げたが、今回のフィールドワーク調査で調査した農家の人びとの特徴から現代の農業に対する新しい農業の形が見られた。本節ではそのことについて記述する。

4.1 「脱 JA 化」という方向性

近年、時代の変化などの影響により、農業も変化してきている。その中で、農家の農作物を売る手段も変化してきている。それに伴い、JA に頼らない販売方法や栽培方法で農業をする「脱 JA 化」という傾向が見られている。実際に、今回の調査では、JA と関わりを持たない農家が多くみられた。また、JA の他にも、地域の農業を支えて、農業を良くしていこうと活動している団体も大須賀地区には存在する。以下、JA とはまた別の形で農業を支援する団体と JA に頼らない 4 名の農家に話を聞き、「脱 JA 化」の傾向について記述する。

4.2 NPO 法人「とうもんの会」

NPO 法人「とうもんの会」は、JA に頼らない農家の農作物の出荷先としての役割や JA とはまた別の形で農に対して取り組んでいる。本項では「とうもんの会」の活動について記述する。

NPO 法人「とうもんの会」は 2007（平成 19）年 4 月 1 日に開館した田園空間博物館とうもんの里総合案内所を拠点として、農業や農村文化の情報発信、体験交流に関する事業を担っている法人である。法人自体は 2005（平成 17）年 3 月 6 日に誕生している。「とうもん」という言葉は田園や稲面に由来する水田の広がる所を意味している。

理事長の名倉光子氏（女性、68 歳）にとうもんの里の取り組み、経営理念などについて話を聞いた。とうもんの里は毎週金・土・日曜に「朝採り市」と呼ばれる農産物直売所を開催している。直売所を始めた理由として、名倉氏は、農業風景を残したい、農業が継続できる仕組みを作りたいということで、まずどんな農作物がこの地域にはあるのかを紹介するため、また農家を経済的に支援するために始めたという。直売所は朝 9 時から開催されるが、開催直後から多くの客で直売所はいっぱいとなる。現在では契約農家は 320 件で、毎回 120 人ほどの農家が出荷しに訪れるという。「朝採り市」に出荷する農家は、採れたてをすぐに販売できて、消費者から「おいしい」という言葉をすぐに聞けるという面でも直売所は農家と消費者の交流の場となっている。名倉氏はこういうやり取りができる場が作れるところも直売所を始めた理由の一つと話す。

また、「とうもんの会」は農業の良さを伝えるという使命を担っている。上述のように、近年、専業農家の減少は大須賀地区でも顕著である。専業農家はコストの高騰や、農作物の販売価格の低下により経済的に農家は厳しい立場となってきた。一方で街に働きに出ながら小規模農業を兼業している家庭が裕福となる傾向がみられるようになった。その結果、コミュニティや生活の基盤はサラリーマン中心となった。農家の減少に伴い、農家のつらさをわかってくれる人たちも減少し、農薬の散布による農薬の洗濯物の付着などへの地域住民の苦情も多発するようになった。そして段々と農家に不利な社会が形成されるようになり、さらなる農家の減少につながった。そこで、「農業の良さ」を理解してもらえるように様々な事業を開始した。「とうもんの会」は自然観察部・農業体験部・食体験部の 3 つの部門が存在する。それぞれの部門が年中様々なイベントを開催している。地域に食べ物がある、農業があるという当たり前のことを農業が衰退してきた今となって見直せる。この見直しのためにもとうもんの里は大切な使命を担っている。

4.3 「脱 JA 化」する農家の示す農の形

次に本項では JA に頼らない 4 人の農家を紹介し、その人びとの農業史や農業観について記述する。

C 氏（女性、60 代）

農家の兄の手伝いをしており、トマト、とうもろこし、すいか、ゴールドメロン、さつまいもを栽培している。以前は稲作もしていたが、近代化に伴う機械化の影響で、周りの農家は農具の機械を購入するようになったが、C 氏は機械を買えるほどのお金がないために他の農家に稲作を委託するようになってやめた。C 氏は自分で直売所を作って朝に採れたものをすぐに自分で売れるように工夫している。理由としては店や市場に出荷すると 3 日以上経って販売されるようになり、新鮮な作物を提供できなくなり、朝一番の採れたてのものを提供したいと考えたからである。以前は C 氏の他にもそういう農家は多かったが、近くにサンサンファームができてからはそちらに移行する農家が増え、年々減っていったと

いう。C氏はこれからも直売所を続けていくつもりだという。

D氏（男性、60代）

戦後から農業を始めた農家の2代目で、親の代から農業を続けて70年目になるという。ビニールハウスの中で栽培することなく自然のものすべてで栽培しており、以前からJAに頼らずに自身で農園を営んでいる。昔からずっと変わらずみかん類を栽培しており、途中で米も栽培したが、現在は主にみかん類の栽培をしている。農園は現在30代の息子が主に運営しており、ご自身夫婦とお手伝いさん2人がサポートしている。農業観については、すべて自然を頼りに農業をやることであるという。また、JAとの関わりがないことについては、JA組織の主体が変革したため、昔から関わり合いはなかったが、今現在でも関わる気持ちはないという。

E氏（男性、40代）

家族代々でメロン農場を営んでいる。メロン自体は栽培して50年目となる。元々はJAに出荷していたが、16、17年前にバブル崩壊とともに新しいことをやりたいという想いで自主販売をスタートさせた。静岡にはメロンを食べるところが少ないということもあり、メロンを提供するところを作りたいということで15年前に店舗兼カフェを始めた。また、市場出荷だと4日程度経過して販売され、食べどきが過ぎて消費者の元に届くということもあり、いちばんおいしい食べどきのものを自分で直接提供したいという想いで10年前に独立してメロン農場を始めた。農業観については、農業でのし上がっていきこうという気持ちは強くなく、自分たちが目の届く範囲でやりたいという。消費者と接せられるよう、消費者との距離を近くしたい、消費者からの生の声を聞きたいという理由で規模もあまり大きくしたくないという。JAに頼らず、自分たちのできる範囲で直接販売を行い、消費者との距離を近くしたいということでネット販売もあまり行わず、顔の見える範囲でメロンを売りたいと話す。農場のホームページも業者に頼らず自分たちで作るという徹底ぶりである。

F氏（女性、30代）

両親が40年前から干しいもを作り、自分の店で販売している。13年前にネット販売を始め、9年前に会社を設立した。以前は他の農家が栽培したいもを販売しており、20年前から自分たちでもいも栽培を開始した。干しいもや焼きいもなどを全国的に販売展開しており、以前にいもを使ったスイーツを県内のお菓子屋と協力して販売し始めた。ネット販売を中心としており、店頭でも少々販売している。会社の経営理念としては、自社、消費者、周辺店舗でWin-Winの関係を築きたいという。また、課題としてはいも農家の高齢化が挙げられた。干しいもは静岡発祥であり会社のメイン商材であるため、その伝統を続かせるためにも干しいもをなくすようなことはしたくないという。そのためまず、商品の原料で

あるいもを絶えず提供できるように、高齢のいも農家を支援している。たとえば、農家が市場出荷する際には農家自身が出荷場所へ農作物を届けねばならず、体力的に負担がかかってしまう。そのため、F氏の会社では農家の畑まで農作物を直接とりにいくことで、高齢の農家の体力的な負担を減らしている。また、売上金などは出荷日よりもある程度の日数が経過した後に支払われることが多いが、F氏の会社の場合はお金を早め早めにお支払いするなどの工夫をしている。

以上の「脱JA化」の方向を示す4人の農家の話から、JAに頼らない独自の様々な農の形があることがわかった。その理由としては、「消費者に採れたてを提供したい」、「消費者の声を直接聞きたい」ことなどがあげられた。これは、現代のツールや通信手段の発達によることが影響していることもわかった。時代の変遷とともに以前にはなかった新しい農の形というものがあることを知ることができた。



写真1 話を聞いた農家の畑（森脇撮影）

5 考察

大須賀地区には前項で取り上げたように様々な販売形態が存在する。現代社会はネット社会といわれている。インターネットでいろんな情報を集めることができ、インターネットを使って何でも買える時代である。前項で取り上げた農家の中にもインターネットを使用して農作物を販売する農家の人もいた。中でも、F氏（女性、30代）の会社では、インターネットでの販売が大半を占めている。一方で、E氏（男性、40代）はインターネットでの農作物を一切販売していない。また、C氏（女性、60代）のように自分で直売所を作って農作物を売る農家も大須賀地区には複数見られた。まさに販売方法は多様であり、その理由も様々である。

その中で、様々な農家の人びとの話からは、「昔はみんな JA を頼っていた」という声が多数聞けた。近代化に伴う農業の機械化などの時代の変遷とともに、農家の販売形態は様々な変遷を経てきた。また、JA の組織自体の変遷などの声も聞けた。たとえば、「昔は農業を良くしていこうと奮闘していたのに、今だと自分の会社のために奮闘して金融メインの方向に向かっている」、「新しい機械を勧められるばかり」などである。このように JA が変遷していったことについて、大泉一貫は、「農協の営農・販売事業の縮小の背景には、第一に、農家の脱農・兼業化（＝農業離れ）がある」、「第二に、農産物の価格の低迷があり、そして第三に、担い手・大規模農家の農協離れが大きい」と述べる（大泉 2014）。近代化による農業の衰退で、農家が「脱農化」したことにより、JA も経営が厳しくなり、農業だけでなく共済や金融の事業を拡大せざるを得なくなったのだろう。そうした、農家の脱農化という変化により JA も脱農化という変化を起こし、結果的に JA を頼っていた農家の販売形態も「脱 JA 化」という販売形態に変化したのであろう。その状況が渦巻く中で、今回調査した農家の中にも JA に頼らない農家の販売形態、「脱 JA 化」の傾向が見られた。以前には見られなかった「脱 JA 化」という傾向は、現代農業とこれからの農業のあり方の新しい方向性の一つであろう。また、「脱 JA 化」の傾向がある中でも、JA の選択が結果的に生み出した「脱 JA 化」とは異なった理由で JA に頼らない農業のあり方を選択した農家も存在する。直売所経由、個人販売、個人農園、農業法人化などの販売形態への推移は、風土に合わせてのんびり行うためや、地域活性化など、全てが JA の影響によるものではない。時代の変遷とともに生まれてきた「脱 JA 化」という新しい方向性が加わることで、さらに農業は多様化してきているといえるだろう。

6 おわりに

農家が自由に売り方などを選ぶ時代になっている現在、農業はとても多様化している。上述の通り、JA に登録する全体的な登録農家数は減っている。その中で今回調査した農家の特徴から見出された「脱 JA 化」という傾向はやはり今後の新しい方向性となり得るだろう。

また、大須賀地区の農業について地域の人びとに尋ねると、「みんなのんびりとやっている」という声が聞けた。大須賀地区は山と海に囲まれており、自然環境が豊かであるということも関係しているだろう。大須賀地区の農業は砂地を利用した独特な農業形態が存在する。その農業と自然環境を守ろうと動いている人たちが存在している。たとえば、本章で取り上げた田園空間博物館とうもんの里と大須賀物産センターサンサンファームは地域おこしのために、まずは農業からよくしようという想いを持って創立された。調査中にその 2 つの施設にある直売所へ向かったが、連日たくさんの客が訪れていた。直売所では農産物を買うことが目的ではなく、人びとの交流の場にもなっているように感じた。上述の通り、直売所は農家と消費者との交流の場となっているだけでなく、消費者と消費者が交

流する場ともなっている。調査中では「この地域の人たちはほとんどみんなが顔見知りの関係」という声が多数聞けた。直売所では年配の人たちだけでなく、若者と年配の人たちが会話している場面を見て、地域の人たちの繋がりの実感した。大須賀地区のこの繋がりによって農業を支えることも可能ではないだろうか。地域全体で農業を支えるという試みも必要になってくるであろう。地域全体で農業を支えようと動いてその繋がりの実感を活かすことで、農業はさらに良くなるだろう。このような繋がりの実感や、「顔見知りの関係」を活かせる可能性を持っていることが大須賀地区の良さだと感じた。

参考文献

大泉一貫編

2014 『農協の未来 新しい時代の役割と可能性』 勁草書房。

大須賀町誌編纂委員会編

1980 『大須賀町誌』 大須賀町。

農林水産省

2000 「2000 年世界農林業センサス報告書」(2016 年 7 月 12 日取得、
[Http://www.MAFF.go.jp/j/tOKEi/CEnsus/aFC/2000/Dai1Kan.HtMl](http://www.MAFF.go.jp/j/tOKEi/CEnsus/aFC/2000/Dai1Kan.HtMl))。

2005 「2005 年世界農林業センサス報告書」(2016 年 7 月 12 日取得、
[Http://www.MAFF.go.jp/j/tOKEi/CEnsus/aFC/2005/Dai1Kan.HtMl](http://www.MAFF.go.jp/j/tOKEi/CEnsus/aFC/2005/Dai1Kan.HtMl))。

2010 「2010 年世界農林業センサス報告書」(2016 年 7 月 12 日取得、
[Http://www.MAFF.go.jp/j/tOKEi/CEnsus/aFC/2010/Dai1Kan.HtMl](http://www.MAFF.go.jp/j/tOKEi/CEnsus/aFC/2010/Dai1Kan.HtMl))。